

## インタビュー 新人先生に聞く①

# 緊張した保護者の学校批判

—教員、二年目のA先生(女性)

大滝 浩道

教員になって何を感じましたか

学生時代には授業のすすめ方ばかり考えていました。ところが教員になって、いきなり新一年生の担任になって、保護者とのかかわりが出てきて大変戸惑いました。学生時代はあまり考えていませんでした。子どもたちとの関係はあまり違和感なく接することが出来ました。特に新一年生の担任になると保護者の方から「これ必要ですか」とか「こんなもの持っていった方がいいですか」とかの質問が出されて迷いました。また「学校に行きたくない、と言っているがどうしたらいい」な

どの質問もあり、先輩の先生にお聞きして対処しています。

一番困ったのは昨年の六、七月頃に保護者のお父さんから電話があり、話しているうちに話の内容が学校批判になりました。他の先輩の先生に代われればよかったのですが、電話のことなので代わり損ねて困惑しました。しかしこのお父さんは最後には理解してくれました。

その背後には子どもが私を信頼していたからだとは思っています。その後はこのお父さんともよい関係をもちことが出来ました。やはり保護者と担任の関

係の背後には子どもが担任を信頼しているか、どうかだと思います。子どもとの関係がうまくいくと、父母との過度な緊張感もなくなると思います。

子どもたちのトラブルにはどう対処していますか

家庭で親子の関係が悪く、学校で暴れる子どもがいます。そのために私とその子どもにかかわり過ぎて、他の子どもたちの世話をやけないことが何回もありました。また一人の子どもが騒ぐと、すぐ学級全体に感染してパニック状態になります。

そんな時は正直、教員を辞めたいと思うことがあります。

でも教室で暴れるとか騒ぐなどのことは毎日のようにあります。そのため休み時間も休めないことはよくあります。

やはり一番困るのは授業がすすまないことです。

トラブルが起こったときは、まわりの先生に援助を求めらるることになっていきますが、他の先生も授業中なので、やはり出来にくいので一人で対処しています。

よくトラブルを起こす子どもは学校全体で何人かいますので、学校では学年ごとに情報や指導方法を考え

て対処することになっています。

子どもたちの指導で困ったときは学年会で話したり、学年主任の先生や生徒指導主任の先生に相談します。うちの学校は話しやすい雰囲気なのでとても助かります。

学校での日常はどうなっていますか

私は毎日、朝の七時半には登校して一日の準備をしています。

朝の登校時には子どもたちが、〇〇さんがどうしたとか、家でこんなことがあったとか話かけてきます。その相手をしながら子どもたちの様子を観察します。

その後は職員の打ち合わせなどがありますが、1限の授業に出ると、低学年なのであとは出すつぱりです。昼食時間も時間内に食事が終わらない子どもたちがいますので、その指導で休めません。もし時間があれば連絡帳を見たり記入したりしています。トイレに行く時間もありません。

低学年は下校時間が高学年より早いので、放課後の時間に多少のゆとりがあります。しかし下校時にもトラブルがあります。通学区ごとに集団で帰りますか

「○○ちゃんが一人で帰った」「仲間に入れてくれない」などのモメゴトがあつて、その相手をしなければなりません。子どもたちはみんなが納得しないとモメゴトは収まりません。

やっぱり帰り道が愉快で楽しいと、笑顔で帰宅しますので、この指導も大切です。

放課後は学年会や委員会などがありますから、翌日の教材研究などの準備の時間はなかなか取れません。私は教務室では集中できない方なので、子どもたちの指導方法について、まわりの先生方の話を聞くことが多いです。

担任の仕事では親へのアンケートとかの集計的業務がとても多いです。この集計が学年、そして学校全体へと積み上げられていきます。何でも数値です。これが学校評価の基礎資料になるようです。

帰宅する時間はだいたい六時過ぎですから、普通だと思えます。

学校で全ての仕事をやると八時過ぎになります。ですからどうしても積み残した仕事は家に持って帰るか、土日にまわすことになります。

### 職員会議では自由に話せますか

職員会議はほとんどが事務的な連絡で終わります。生徒指導について話すのは年二回くらいです。このときは問題のある生徒の指導について職員全体で「こういう指導をして下さい」などと確認する場になります。日常的に子どもたちについて情報交換や指導方法について話し合うのは学年会です。

### 校長先生と話し合うことはありますか

校長先生はときどき教室を回ってきますが、子どもたちが喜びますから、もつと入ってきて欲しいです。普段、校長先生から直接指導を受けることはありませんが、年に三回ある教員評価のときの面談でお話します。このときは一回の面談が四日に及びます。自分や学年の教育目標を数値で設定して、その後の中間評価、そして三学期の最終評価となります。でも教育計画を数値化するのはとても大変です。

こんな数値って意味あるの？子どもたちのためになるの？と思います。教員の時間を奪っていると思います。でも学年としては八五%をクリアし

たいと思つてやっています。

新採用から二年が経ちますが、いまの感想は

私の学年は4学級ですから、四人の担任がいますが、いまはお二人の方が病休ですから、二人の講師の方が入っています。教員二年目の私と三十代の方と二人で学年を支えているのが実態です。学校全体でも何人かの病休の方がいます。

一年目が終わったとき、自分が楽しくないと子どもたちも楽しくないはずだと思いました。だから楽しく一生懸命やらなければと思つています。

今年は強弱をつけることを覚えめました。一年目のように何事にも全力を出すことも必要ですが、いい意味で「息抜き」もメリハリがついて大事なことだと思つてます。

自分も少しは成長したと思つています。

(文責・大滝浩道)

## 「心のノート」と「事業仕分け」

もう旧聞だが、「事業仕分け」で藤原和博さんが、文科省の道徳教育副読本「心のノート」(中学生用)をもとに文科省の役人を追及した。「この学級に正義はあるか」という箇所、「あるべき心の見本市で気持ちが悪い」と、子どもたちに接してきた経験で背景に批判した。藤原さんは、03年、都では初の民間人校長として杉並区立和田中学に勤め、同校に塾と連携した夜間塾を作るなどしたが、退任し、いまは東京学芸大学客員教授である。

「心のノート」は週刊誌大の多色刷りで、小学校低学年、中学年、高学年用及び中学生用の4種類で7億3千万円の予算で作られ、02年4月、全国の小、中学校に配布され、翌年は3億8千万円で賄われた。著者名も発行元の連絡先もない妙な本で文部科学省とだけある。

三宅晶子さん(千葉大教授・イメージ文化論)は、「ノート」が出た当初から、極めて巧妙に仕組まれたマインドコントロールの道具で、子どもたちを「本音と建前」を使い分ける、二重人格にすると、専門の立場から警鐘を鳴らした。この機会に学校ではどのように使われているか、ムダか否か調べてみたい。

(吉)